

# 与那国島海底の遺跡様地形の調査・研究

木村政昭

きむら まさあき

新嵩喜八郎

あらたけ きはちろう

琉球大学海底調査団\*

りゅうきゅうだいがく かいていちょうざだん

-----編集部-----

琉球大学理学部 教授

入船エンタープライズ

\*琉球大学海底調査団（1997～1999年まで；ただし年度によって構成が異なる）木村政昭・大森保・棚原正巳・本山功・中村衛・池田栄史・土肥直美・小野朋典・八木秀憲・倉富和幸・富山元進・徳原晋一・鈴木元・田原誠之・石川嘉子・若林倫永・石川嘉子・福守さゆり・坂本理子・植田三恵・玉城枝利香・千原卓也・中村俊夫・新嵩喜八郎・赤星陽太郎・平城徳浩・新藤健一・小崎達夫・成田均・J. Mayol・G. Huncock・伊藤孝・U. Dopatka・大内徹・原俊雄・古川雅英（順不同）

最近沖縄の海底に、遺跡によく似た地形がそこここで発見されはじめた。なかでも、日本最西端にあたる与那国島南端の新川の南150mほどの沖合いにある「遺跡ポイント」が有名である。水平方向にも垂直方向にも直線的によくのびる形態は、階段ピラミッドにも似、形態的には人工物であるとの指摘がある。

## 1. はじめに

与那国島（図1）の海底遺跡らしいものの一部は、1946年、今から53年ほど前に目撃されていたらしい、また、それ以前にも見た人がみたらしい（八重山毎日新聞、1998年2月2日付記事）。そこを1986年に、地元ダイバーである新嵩喜八郎がダイビングスポットとして「遺跡ポイント」と命名し、それ以降写真資料等が提供されるようになった。水深から推定すると、1万年ほど前に陸上にあったことが推定されるものであるため、ピラミッドより古い世界最古の巨大建造物かと報道されたこともある。

それはおよそ今から1,700万年ほど前に海底に堆積してできた八重山層群と呼ばれる硬い砂岩が削られて作られたものであり、いわゆる自然石が削られてできている。このように、自然石が削られてできたものは、石組みと違って、自然の浸食できたものか人工的に削られたかを見分けることが大変むずかしい。

そこで、1992年・1994年の予備調査を経て1997年3月、7月、1998年3月、7～8月と12月、そして1999年7月と10月の7回にわたって、琉球大学海底調査団が、「琉球弧地殻変動の研究-道跡様海底地形について」の一環として、与那国島の遺跡調査を行った。調査は、スクーバダイビングによるもののほか陸上調査も行われた。また、その間主として地元の新高氏ほかのダイバーが得たビデオ記録やスチール写真などを加えた。それらをもとにして遺跡ポイントおよびその周辺の形態を復元してみた。その際、ボストン大学のシヨック教授・東京大学の石井輝秋助教授をはじめ、内外の地質学・考古学・歴史学の専門家との調査協力も得られた。また、1998年7月には、与那国町教育委員会の長浜一男教育長により、ガラスボートによる海底遺跡の検証が行われた。得られたデータは、高宮広衛・萬元政秀・安里進氏・加藤晋平氏らをはじめとする考古・歴史研究者にも見ていただきコメントをいただいた。小論では、その地形の全容を明らかにすることを目的とした。その結果に対して、それが人工的か自然かといった解釈については、必ずしも統一見解が得られているわけではないが、全体の形態についてはおおよその合意が得られたので、ここに報告したい。

## 2. 遺跡ポイントの形態

その結果、遺跡ポイント付近には、確認されただけでも5つの遺構状の地形が認められた。それらの海底地形は海丘とってよいものである。それらの中心部は、階段状の構造を特徴とした最も遺跡らしい海底の高まり（海丘）となっていることがわかった（図2）。したがって、ここを「第1海丘（だいいちかいきゅう）」と仮称しておく。その南に位置する2つの遺構状の地形をそれぞれ西から東へ第2、第3海丘と仮称する。全体の位置図を図1に示す。

調査の結果、与那国島新川沖海底の第1海丘は、岸から100mほどの沖合にあり水深25mほどのところから立ち上がる、ピラミッドにも似た地形であることが明らかとなった（図2）。その高まりの全長は東西に長く、斜面は階段状になっており、城壁のようにもみえる。長さは東西方向に250m、幅は南北方向に150m、高さは26mほどある。正確には、長軸の方向は東北東-西南西方向にのびている（図3）。そして、以下に述べるような特徴がみられることがわかった（図4）。

- 1) 階段状地形は断層によってできたものではない。
- 2) テラス（平坦面）の角は、ほぼ直角で数m以上の長さにはわたってまっすぐにのびているものが卓越している。したがって、そのような角は引っ張りの力ではがれてきたような引張性シアによるギザギザは認められない。
- 3) 遺跡ポイントを特徴づける大きな階段状地形のコーナーは、角が取れてなめらかなにはなっていない。
- 4) 破断面に何らかの打撃痕と思われる凹凸がひんばんに認められる。園分直一氏も琉球大

学海底調査団の資料を検討してそれを認めた。付近海底に打撃痕のある石片が一部認められた。それらには、もとの石を加工する際はがれてできたものも含まれるかもしれないので検討中である。

5.平坦面や凹所の形態をみると、自然の侵食や重力滑りでは形成されにくい地形が多数認められる。

6.第1海丘の足下には、基本的にはそれを取りまいて、通路のように平坦な露岩が続いている。そこが地形的に最も低くなっている。自然にしる人工にしる、削り落とされた片は地形的に最も低くなった所に落ちているはずであるが、ここでは石がきれいに片づけられたようになっている。そして第1海丘と反対側に石が片づけられたように積み上げられている。

7.新川第1海丘の上部や下部に、しばしば排水溝のような溝がある。時としてその溝は通路を横断する。第1海丘の南側（正面？）には、下から頂上のテラスにまで人が上れるような通路様の高さ20m前後の階段と思われるものがある。一方、遺跡ポイントの後（北側）にも第1海丘に登れる石段のようなものがあり、さらに陸側に一部連続していることが認められる。このように、一定間隔で人が一足ごと自然に上れるような段がある（福島駿介、小倉暢之1998年談）。

8.遺構頂部には、直角に掘り込まれたような比較的広いプールのような凹所があり、そこにあった地層は自然の力ではどけられにくい不自然なへこみである。そしてそのそばに径70cm、深さ1mほどの穴が2つ、離れたところにより小さな穴が1つ確認された。

9.新川第1海丘は、一部海上にも出ている。そして、別の場所では、基本的に似たような石造構造物が海から連続して陸上に広く認められた（サンニヌ台）。陸上のものには、打撃痕や節理と異方向の切れ目がより明らかに認められ直線的かつ規則的な階段のような地形が認められる。

遺跡ポイントにおいては、平坦面が発達し、良く加工されたように見える。遺跡ポイントは、全体としてそのスケールの大きさと平坦面が発達し、郭のようにいくつかに分かれている点が、沖縄の巨大グスク（首里城グスクや中城グスク）に似た形態と解せる面がある。遺跡ポイントの西半分は、その周囲がループ道路のような通路によって囲まれている。そして、その外縁はほぼ完全に巨礫あるいは根付の自然石の壁で囲まれているように見える。そして、その囲いの中に入るには、トンネル状の穴が1カ所ある。ここは、アーチ門のように、幅80cmほどの切れ目の上に巨石を3つ詰め込んで塞いだ形になっている。穴の高さは160cmほどである。それは、あたかもグスクのアーチ門のように見える。

そこをくぐって入ると、すぐ広場のような所に出る。それは遺跡ポイントのループ道路にあたるものである。目の前に厚さ50cmほどの長方形の石版が2枚合わさったように立てかけてあり、7mほどの2本の石柱がトーテムポールのように見える。

そこを道沿いに右方へ行くと、遺跡ポイントの南側に出る。そこは幅6mほどの道に

なっていて、そこを突き当たると、遺跡ポイントの上にはのぼっていける石段がついている。この石段の下のループ道路に径が6mほどの巨石が道をふさいでいる。上り階段の1つ1つの段の高さは20cm前後である。石段の下半部は、途中石段が不明瞭になる所があったり、幅も最初は広がったものが狭くなったり不規則に見える。しかし中程から上は非常に明瞭な上り階段状になる。途中1カ所50cmほどの高さの段があるが、それをこすと楽に上まで行かれるようになっていて、それに沿って上ると最上段の広い平坦面に出られるようになっていて。

そのさらに一段上に径50~70cmほどの円い穴が3つ認められる。また、上り階段を上りつめたところに、亀が2匹、向き合ったような形に整形されたような高まりが存在する（図2）。

### 3. 遺跡ポイント周辺の景観

遺跡ポイントは周囲を小高い高まりに囲まれている。すでに述べたように、決して平原の中にポツリと一つだけあるのではない。遺跡ポイント周辺の丘の上も平坦になっていたり、階段状のものが認められる。遺跡ポイント周辺のそれらも遺構とすると、まさに、エジプトやマヤ文明にみられるピラミッド群のような観を呈する。とくに、ポイント南側のそれは顕著に見える。ちょうど、西南を開けて、三方が囲まれた形になっている。しかし、そのどれもが遺跡ポイントほどきちっと整形されているわけではなく、むしろ遺跡ポイントを中心に対称的に見える。たとえば、どれもがほぼ単純な階段状地形を作っているが、階段は必ず遺跡ポイントの方に向かって落ちているように見える（図3）。また、東崎の方にも遺跡柱地形がある。

また、遺跡ポイントの西方へ行くと、行けども行けども平らな岩盤（八重山層群の砂岩）の露出地帯に出る。また、川のアトのような砂地に出、その周辺はかつての畑か水田の跡かとも想像されるような場所がある。遺跡ポイントより東方の海底は、これより東崎までのおよそ4kmの間の海岸線に沿って、海・陸に断続的に人工的階段地形が認められる。とくに、7月の調査でその部分の海底調査を行うことができた。

新川鼻と立神岩の間は未調査であるが、立神岩とサンニヌ台の間は階段状地形が頻繁に認められる。ただその分布は10m以浅とそれより深いところに分かれるようだ。この間に破砕帯（断層？）があり、それより海側の海底は深くなっている。

この地域での人工的地形とは、まず立神岩の波打ち際の平坦面がそれである。また、その少し沖の水深7~8mほどから立ち上がる石の壁に囲まれる石舞台といわれるものがそうだ。おもしろいことに、その一角に目と口が刻まれているモアイ像のようなものがある。とくに、目は瞳にあたる所が高まりになっている。目や口にあたる部分は明らかに切り込みがあり、直角な部分が認められ、深さも20~30cmほどはあろう。また、サンニヌ台にも石舞台とそっくりなものが水深数mほどのところに7月の調査で新たに確認できた。た

だし、目のようなものは未確認である。

遺跡ポイントの上り口やアーチ門状のものが西方にあり、西を意図しているようなので、西崎沖を調べてみた。ここはハンマーヘッドシャーク、シュモクザメなどが見られるポイントとなっていて、深い所である。その水深30~40mの海底に、階段状に切れ込みを持つ柱状の高まりがいくつも認められる。これらは、あたかも与那国島の入り口にあたる西端に設けられた「門」あるいは「見張所」のようにみえる。こうして調べた結果、与那国島の南海岸13kmほどにわたって通常の海底地形としては不自然な地形が点在することが分かった。

#### 4. 陸上に続く海底遺構様地形

与那国町阿仏佗花（あだにばな）にあるサンニヌ台という景勝地がある。ここをよく調べてみると、やはり人工的な形態であることが分かった。その形態は海底へ続いているようにみえる。海底では、遺跡ポイントと同様な大きな階段状地形が認められる。それが水深10mほどまで続く（図5）。

#### 5. 遺物

遺跡ポイントの南側の上り状階段下のループ道路をふさぐように巨石があるが、その下から線刻された石版が得られた（木村、1999）。これは1調査団の998年12月29日に赤星陽太郎氏と新高喜八郎が採取したものである。そのほか和泉用八郎により、石器の可能性が20~30%は残る石斧様の立神岩の東方で1個採取されている。

サンニヌ台遺構中に炉の跡と思われる2m四方の四角なへこみがある。この中の岩は赤く変色して、そこに灰白色の灰の固結したものとともに炭化物が付着している。これは、人が火を使っていたため、石が赤変して、そこに炭化物が付着したものである。そのため、炭化物の一部を採取して年代測定用のサンプルとした(サンプル970716-1-2-1)。

#### 6. まとめ

- 1) 沖縄県の与那国島南岸の海底には、およそ水深30m以浅に遺構に似た構造物がある。そのうち、最も顕著なものは遺跡ポイント（第1海丘）である。
- 2) 遺跡ポイントは、東西約200m、南北130m、高さ26mほどの大きさを持ち、四辺に人工的な階段構造を示している。その形態は沖縄の大型グスクにも似たものである。
- 3) 調査によって示される第1海丘の形態は、一見人工的に見えるものである。したがって、今後この構造物が人工でできたのかそうでないのかの調査・研究を継続することが重要と思われる。

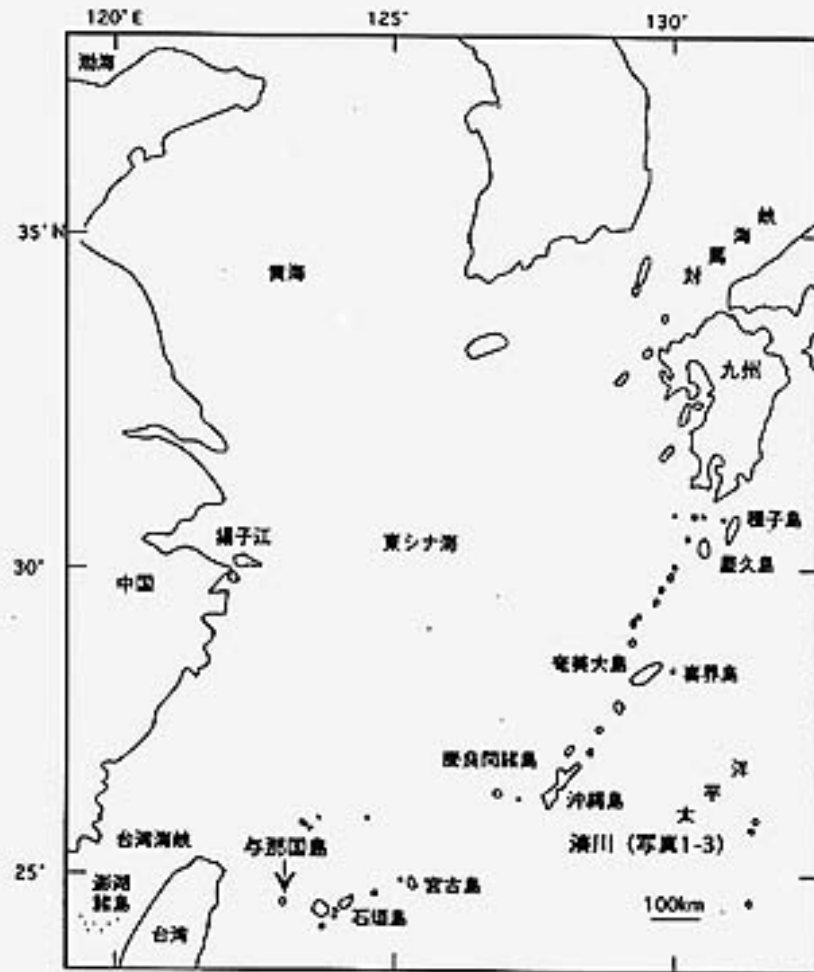
与那国島の海底調査を行うに際し、地元ダイバー、町役場をはじめとして多くの方々にお世話になった。紙面をもって謝意を表したい。

### 参考文献

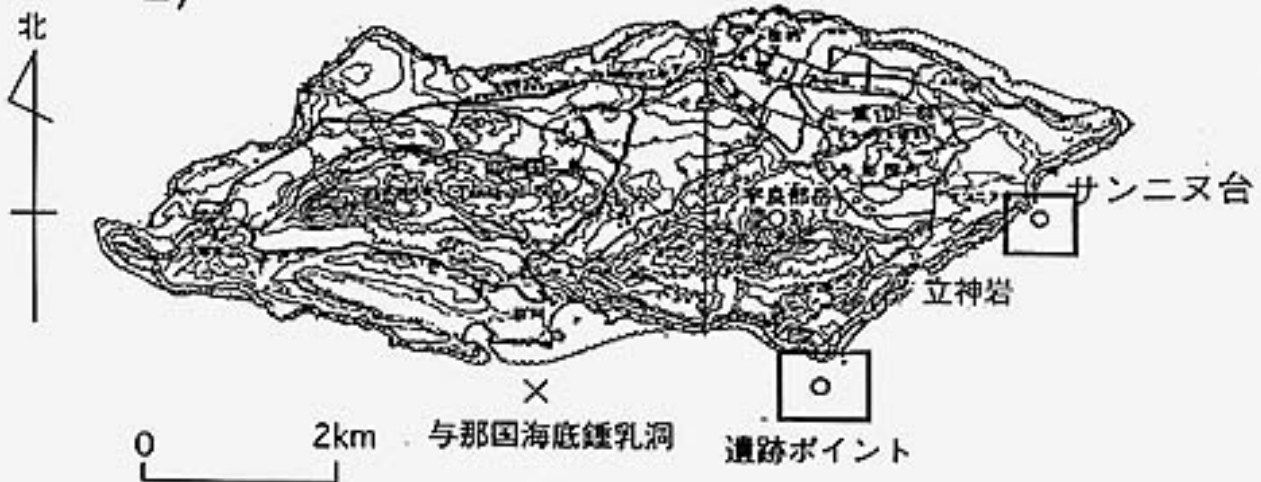
木村政昭：太平洋に沈んだ大陸-沖縄海底遺跡の謎を追う-。第三文明社, 東京, 281pp. (1997)。

木村政昭：遺跡ポイントの形成-人工か自然か-。月刊地球、本誌別稿 (1999)。

1)

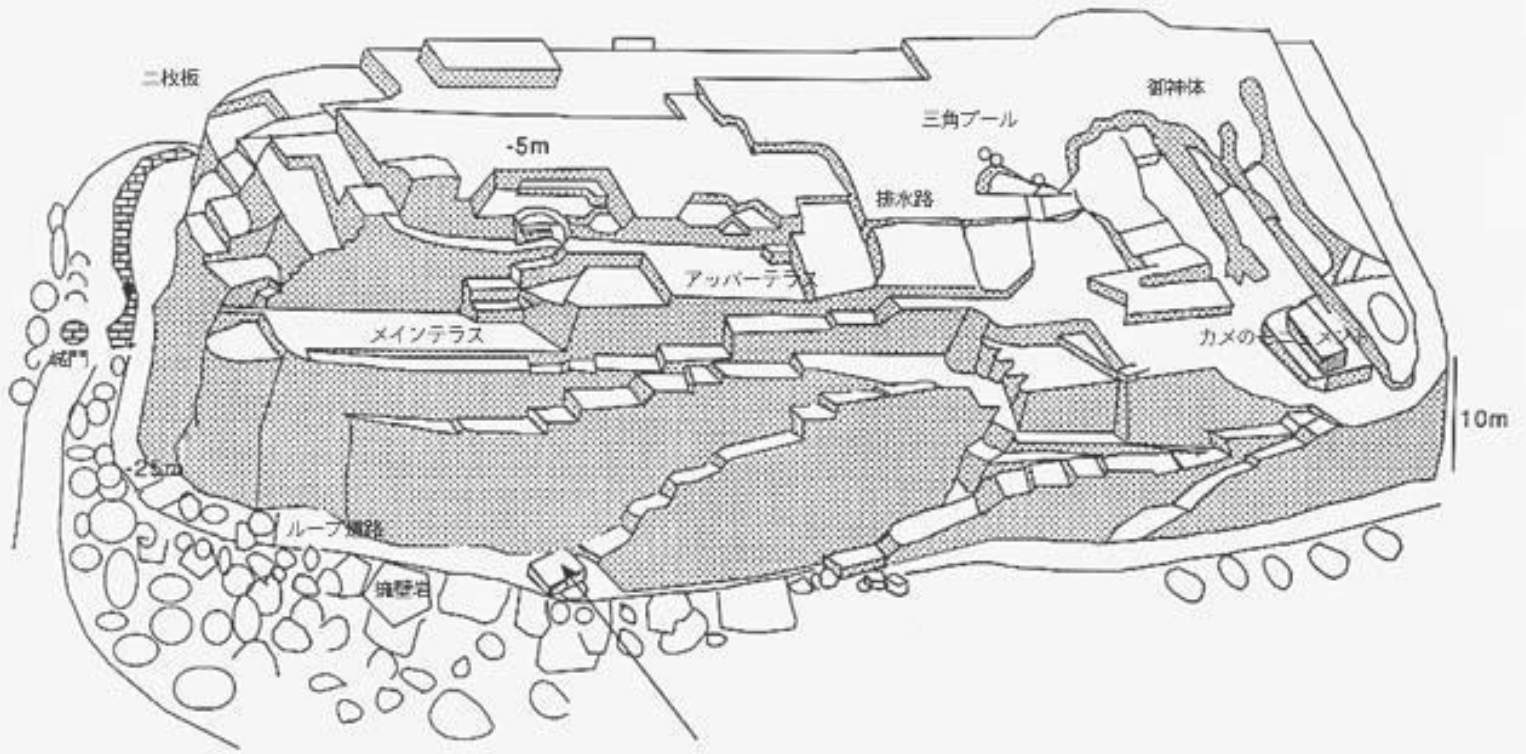


2)



西 ←

→ 東



20m

